京都精華大学はどうして「マンガの大学」になったのか

吉村和真



進め！マンガ研究の路

『火の鳥』に魅せられた少年は、「マンガは研究になる！」と走り出した。学会、ミュージアム、アーカイブ――。「マンガの大学」へと広がった35年の軌跡。

京都精華大学はどうして「マンガの大学」になったのか

吉村和真

星海社

404

SEIKAISHA SHINSHO

まえがき　～手塚治虫との出会いと別れ～

初めて読んだマンガの思い出

私が初めてマンガを読んだのは保育園の年長組だった時のこと、叔父の部屋に置いてあったものだと記憶しています。その部屋の本棚に並んだ数十冊のマンガには、叔父が法政大学に進学してから集めたものが多かったようです。叔父は１９４９年生まれですので、１９６０年代後半に上京していた計算になりますが、その時期は、青年が好む劇画が流行したり、大人向けのマンガ雑誌の創刊が相次いだりと、マンガを卒業しない大学生や若手会社員の存在が世間でも話題になっていました。私の出身地である福岡県嘉穂郡筑穂町（現在の福岡県飯塚市）では、叔父の同世代で東京の大学へ進学する人は限られていたと聞いています。



保育園卒園時の筆者

当時、私の母は自宅と同じ町内で進物店を自営していたのですが、その店があった建物の中に叔父の部屋もありました。保育園の帰りに進物店に立ち寄り、母の仕事が終わるのを待ってから、一緒に帰宅するのがその頃の日課でした。ある日、暇を持て余した私は、勝手に叔父の部屋に忍び込み、たまたま本棚を目にしたのです。

今でも覚えていますが、そこには手塚治虫『火の鳥』と白土三平『カムイ伝』、そして、どおくまん『嗚呼!!花の応援団』が並んでいました。それぞれ『COM』『月刊漫画ガロ』『週刊漫画アクション』を代表する作品の単行本でした。当時の叔父がどんなマンガを好んでいたのか推察できます。

もちろん、その頃の私は漢字をほとんど読めませんでしたので、タイトルはあとで知りました。保育園で絵本を読んだり絵を描いたりするのが好きだった私は、興味本位でその三つを棚から取り出し、パラパラと頁をめくりました。最初に手にしたのは『カムイ伝』でしたが、とても怖いと思いました。なぜなら、人間の首や手足が刀で切られてバラバラに飛び散る場面があったからです。なんだか暗くておっかなくて、すぐに閉じてしまいました。次に見たのは『嗚呼!!花の応援団』でしたが、幼いながらもエッチな雰囲気を察しました。「これを読んでいることがバレたら、叔父さんやお母さんに叱られる」と直感的に

思い、慌てて本棚へ戻しました。

最後に手にしたのが『火の鳥』でしたが、これは読み進めることができました。単純に絵が親しみやすかったからだと思います。そもそも叔父の本棚に手を伸ばしたのは、そこにマンガがあると知っていたからではなく、絵本でもないかなと探していたからでした。正確に言えば、そこにあった本が「マンガ」だということすら認識していませんでした。『火の鳥』は、冒頭がカラーで本のサイズも大きく、絵本のようで読みやすかったのです。あとで振りかえれば、朝日ソノラマ版の「黎明編」だったわけですが、絵柄や展開だけでなく、本としての形態も含め、当時の私にとって最も親和性があったのでしょう。

ただ読み進めるうち、いきなり男の人が焼け死んだり、途中で男の子と中年男性がキスをしたりといった場面があり、ギョッとしました。ハチに刺されて大きく腫れ上がった猿田彦の鼻から膿を吸い出そうと、少年ナギが鼻を噛んであげる感動的な場面を、当時の私はキスシーンと勘違いしたわけです。「うえー気持ち悪い」と思いつつも、どこか惹かれるものがあったのでしょう。その日から母の店に立ち寄るたびに、『火の鳥』の続きが読みたくなり、叔父の部屋へこっそりと通い続けるようになりました。続編がどこまで叔父の本棚に揃っていたのかよく覚えていませんが、「未来編」「ヤマト編」「宇宙編」は同じ機会に

読み終えました。

以上がマンガ初体験の思い出ですが、１９７１年生まれの自分が保育園の年長組だったことを考えると、この『火の鳥』との出会いは１９７６年ということになります。当時の手塚治虫はすでにベテランだったわけですが、この時の体験が影響して私はファンになりました。小学校に入ると、マンガ好きの友達が増えましたが、手塚治虫の愛読者はあまりいませんでした。ただ『ブラック・ジャック』は、小学校の学級文庫に置いてあったため、周囲でも比較的人気がありました。

私の同世代では、まず月刊誌の『コロコロコミック』や『コミックボンボン』を読み、週刊誌の『少年サンデー』『少年マガジン』『少年ジャンプ』『少年チャンピオン』へ移行するという流れが主流で、それらに掲載されていたヒット作に人気が集中するのが一般的でした。もちろん私も、同じ雑誌や単行本を読んでいましたが、このマンガ原体験が影響して、その後も貪るように手塚作品を読み続けました。同じ趣味の友達がそれほどいなかったので、少し寂しくもあり逆に誇らしくもありといった感じでした。

少年時代のマンガ体験

私が小学生から中学生の時期にあたる1977年から1984年にかけて、講談社から『手塚治虫漫画全集』が刊行されました。定期的に発売されるたび、本屋に勤めていた友達のお姉さんが購入していたので、厚かましくも、その家に遊びに行っては手塚全集を読んだり借りたりしていました。友達からすれば迷惑なやつです。

その中には『地球を呑む』や『奇子』、『人間昆虫記』といった、いわゆる劇画調の作品もありました。それらは『ビッグコミック』などに連載されていた大人向けのマンガで、単行本の表紙もエロティックでしたが、中学生だった私はちょっと背伸びして読みあさりました。テーマだけでなく絵柄も初期の丸みのあるタッチと比べると暗いのですが、作り込まれたストーリー展開や魅惑的な人間模様に惹かれました。中でも『きりひと讃歌』が大好きで、大都社版の単行本を自分でも購入し、何度も読み返しました。

大人びたマンガばかり読んでいると学校ではちょっと浮いてしまいます。しかも周囲の友達は、あまり手塚作品を読んでいませんでした。それに対して私は、手塚マンガだけでなく、売れ筋の少年誌に掲載されていた人気作品も読んでいましたし、三歳下の妹に加えて近所にマンガ好きの女の子がいたので、『りぼん』『なかよし』『週刊マーガレット』『別

冊少女フレンド』など、雑誌やその単行本を貸し借りすることで、少女マンガも読んでいました。さらに、父が『ビッグコミック』と『ビッグコミックオリジナル』を買っていたので、大人向けのマンガもそれなりに読んでいました。要するに、性別や世代に縛られず、さまざまなマンガに接する環境に恵まれていたわけです。

とはいえ、大人向けのマンガは親に隠れて読んでいました。その頃の『ビッグコミックオリジナル』には、『魔物語 愛しのベティ』『人間交差点』『ヒゲとボイン』など、子どもには刺激の強い性表現や暴力描写のあるマンガも連載されていて、読んでいるのがバレたら怒られると思っていたからです。それでも『浮浪雲』『釣りバカ日誌』『三丁目の夕日』『あぶさん』など、特に長期連載作品はその後もずっと読み続けるほど好きになり、小学生の時分から大人マンガを読む習慣が身に付きました。こうした少年時代のマンガ体験は、いわばマンガに対して「食わず嫌い」をしない体質になったという点で、のちにマンガの研究にのめり込んでいくうえで役立つことになります。

手塚治虫の死

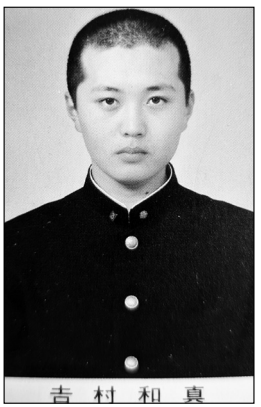
このように、小中学生の頃から自由気ままにマンガを読み続けていた私にとって、突然

大きなショックを受ける瞬間がやって来ました。

忘れもしません。それは、昭和から平成に元号が変わってからおよそ一カ月後となる、1989年2月9日のことです。高校2年生だった私は、剣道部に所属していて、いつも自転車で通学していましたが、その日はたまたま部活後に迎えに来てくれた父の車で自宅に向かっていました。すると不意に、車のラジオから「鉄腕アトムなどで知られる国民的漫画家の手塚治虫さんが、今日、半蔵門病院で亡くなりました」というニュースが流れてきたのです。

その瞬間、耳を疑い、目の前が真っ暗になりました。

動揺した私は、運転中の父に頼んで近くの本屋に車を走らせてもらいました。到着後、店内を見渡して自分がまだ持っていない手塚作品を買い求めました。軽く一万円を超えた代金は、その場で父に借りました。家に帰ってから自分の部屋に閉じこもり、これでもう手塚先生の新作が読めなくなるのかという絶望感と、これまで手塚先生にはずっと楽しませてもらったという感謝の念が入り混じり、帰りに買ってきたマンガを涙ながらに夜通し読み



高校生時代の筆者

続けました。

翌日からもしばらく放心状態が続きました。私が手塚治虫の大ファンだと知っていた家族や友人たちからは、慰めの言葉もかけてもらいました。テレビや新聞では訃報が続き、近親者やマンガ評論家がコメントを寄せたり、国内だけでなく国外のファンからも哀悼の意が示されたりと、手塚治虫という人物の人柄や功績を知るにつけ、その存在の大きさを改めて実感しました。昭和とその人生の期間がほぼ重なる手塚治虫の死は、一つの時代の終わりを印象付ける出来事でした。

本書の構成と想定読者

以上が、手塚治虫との出会いと別れを中心とした、私のマンガ原体験です。この幼少期から高校時代までの体験や記憶が、現在の私に繋がる「路」の基盤となったことは間違いありません。それは、マンガの歴史や影響力を研究したり、マンガに関する授業を担当したり、マンガの学会やミュージアムを設立したり、マンガを通じて国内外の人たちと知り合ったり、そして日々、マンガを読んで泣き笑いしたりと、仕事と生活の両面でマンガと深く関わり続けてきた私にとっての、これまでの歩みと現在の日常に繋がる「路」のこと

です。

本書では、藤子不二雄Ⓐ先生の名作『まんが道』を挙げるまでもなく、「道」というにはおこがましいため、もう少し小さくて狭いルートという意味で「路」の字を使いながら、特に印象に残った出来事や自分がお世話になった方々との思い出を頼りに、一人のマンガ研究者の歩みを述べていきます。

とはいえ、そんな「路」があるなんて、高校時代までの私はまったく想像もしていませんでした。しかもそこには、前進するだけの「進路」や整備された「経路」だけでなく、文字通りの「迷路」や「袋小路」もありましたし、なんとかそこから脱するための「活路」を見出すべく、四苦八苦した時期もありました。

それらの「岐路」に直面した時、自分の羅針盤のように念頭に置いていたのが、大好きだった祖父がいつも私に言い聞かせてくれた人生訓でした。それは「一に引き立て、二に運、三・四がなくて、五に実力」という言葉です。「引き立て」とは人との出会いや縁のことですが、この言葉は私が人生を歩むうえで大切な指針となりました。

本書は6章で構成されています。熊本の大学生から京都の大学院生へ、比叡山のマンガの研究員から京都精華大学の教員へと、自分の経歴に沿って進みます。これが約35年間に

わたる私の「マンガ研究の路」となりますが、読まれる方によっては各章で興味関心の度合いも異なるでしょう。

そこで、私が想定している読者ごとに、本書のねらいについて述べておきたいと思います。

まず、これから進学や就職先を決めようとしていたり、やりたいことがなかなか見つからなかったりして、自分の将来に不安や悩みを抱えている若者たちへ。本書を読み進めると、「好きこそものの上手なれ」ということわざ通り、マンガという「好き」を貫いてきた人生に映ると思います。しかし、実際には「引き立て」と「運」のおかげでなんとかここまで世渡りしてきました。「好きを仕事にする」とか「趣味と実益を兼ねる」といった言葉はポジティブな意味で使われますし、理想的かもしれませんが、人生には「好き」だけではどうにもならないことのほうが多くあります。それでも、できるだけ「好き」を手放さずに、どうやって周囲への説得材料に変えていけるのか、「マンガ研究の路」を歩んできた私なりの経験や考えを伝えることで、一つの参考例にしていただけたら幸いです。

次に、これまでマンガの研究や教育に携わってきた仲間や、これから関わろうとしている人たちへ。この本は一般向けの新書であり、専門的な研究書ではありません。みなさん

にとってはもの足りない面もあるでしょうが、私がどのような動機や経緯でマンガ研究に携わるようになったのか、学術論文には到底書けない舞台裏を覗いてもらえたらと思います。ただ、本書に登場する研究仲間や関係者の数が限られてしまう点については、ここでお詫びしておきます。担当してきた学生たちもたくさんいますが、思い出があり過ぎて選びきれず、結局誰も紹介できませんでした。狭い路でも35年も歩いていれば、あちこちで恩人や理解者、感謝したい仲間や印象深い人物に出会います。誰を紹介するかより、誰を紹介できないかで悩むほど、執筆の過程で多くの人たちの顔と名前が浮かびました。登場する方もしない方も、内容に疑念や不満を感じられた場合は、私の力不足ゆえですので、何卒ご容赦ください。

そして最後に、どうやらマンガが国内外で注目されていることを見聞し、多少なりともその動向が気になっている人たちへ。本書に出てくるのは主にマンガの話題ですが、私が伝えたいのはマンガのことだけではありません。現代日本という「マンガのある社会」に生きる以上、その社会に存在する人はほぼ全員が、自分の意思とは関係なくマンガの影響を大なり小なり受けています。また、一昔前まで「勉強の敵」や「子どもの読物」と見なされていたマンガは、今では「世界に通用するコンテンツ」「新しい日本文化」などと高く

評価されています。

しかし、こうした評価の逆転が起きた理由は、マンガそのものが変化したからではなく、マンガを評価する側の価値観が変化したことによるものだ、という点には注意が必要です。みなさんも「マンガのある社会」の一員として、マンガの教育や研究にどのような役割や意義があるのか、そして、それは将来の日本や国際社会にどのような可能性をもたらそうとしているのか、一介の研究者が歩んだ「マンガ研究の路」を辿りながら、少しでもヒントを見つけていただければ嬉しく思います。

なお、本書に登場する方のお名前は、私が普段から使用している呼び名です。例えば、同じ教員や漫画家の中でも「さん」と「先生」が入り混じっているのは、そのためです。また、「マンガ」の表記については片仮名を用いますが、「漫画家」は漢字にしています。あらかじめご承知おきください。

目次

まえがき　～手塚治虫との出会いと別れ～　3

初めて読んだマンガの思い出　3
少年時代のマンガ体験　7
手塚治虫の死　8
本書の構成と想定読者　10

第1章　「マンガは研究じゃなくて、趣味でしょ」
～熊本大学の路～　23

熊本大学と学生寮へ　24
ゼミの発表と衝撃のコメント　26

夏目房之介さんの講演会に押しかける 29
竹内オサム先生のお宅訪問 33
手塚プロ・古徳稔さんへの取材 35
卒業論文の執筆と提出 38
大学院への進学 43
手塚悦子さんへの取材 45
修士論文の提出と進路相談 50

第2章 「マンガで歴史を研究できるのか」
～立命館大学大学院の路～ 57

京都での不安な新生活 58
立命館での大学院生活 62
影響を受けた二つの理論 66
京都の花井拳骨先生 70

日本史研究会での訓練 73
ジャクリーヌ・ベルントさんとの出会い 75
日本学術振興会の特別研究員になる 77
非常勤講師の貴重な経験 80
京都精華大学での連続講演会 82
「岐路」となったシンポジウム 85

第3章 「マンガ学会を作ってほしい」
～京都精華大学マンガ文化研究所の路～ 91

比叡山の研究所に着任 92
マンガ学会を設立する理由 96
理事の就任依頼に駆け回る 99
米沢嘉博さんからのダメ出し 105
アカデミズムとマンガ学会の関係 107

マンガ学会の反響と活動 110
比叡山での思い出 114

第4章 「マンガミュージアムを作ろう」
～京都国際マンガミュージアムの路～ 119

「マンガミュージアム」構想 120
「なんでマンガなんや！」 122
旧龍池小学校の魅力 124
補助事業の申請とプレッシャー 128
国際マンガ研究センターというエンジン 131
研究センターの第二期プロジェクト 135
継続は力なり 138
二人の館長からの金言 141
講演会にまつわる思い出 144

「土田世紀全原画展」の挑戦 147
マンガ研究の環境整備を続ける意義 152

第5章 「なぜわざわざ大学でマンガを学ぶのか」
～京都精華大学マンガ学部の路～ 155

京都精華大学の理念と沿革 156
マンガ学部の構成と変遷 159
マンガ学部を出たら漫画家になれるのか 162
どんな授業をやってきたのか 165
大学でマンガを研究するということ 174
「マンガはわかりやすい問題」とは何か 178
キーワードとしての「マンガリテラシー」 181
国境を越えて学生が集まる場所 185
牧野流仕事術の教え 189

漫画家の学長が誕生 192
漫画家が大学教員に向いている理由 196

第6章 「なぜマンガに血税を使うのか」
～マンガアーカイブの路～ 201

「国営マンガ喫茶」騒動 202
「なぜ税金を使ってまで」にどう答えるか 204
コンソーシアムの構築を目指して 208
多様な立場の連携促進 212
文化庁事業を支える組織とキーパーソン 215
自治体との連携で東奔西走 220
「学」の役割と「館」との連携 225
「マンガアーカイブ機構」の設立 228

あとがき ～「自由の学び舎」と歩み続ける路～ 233
自伝を書く意味とは 233
最近の路について 236
「自由の学び舎」であり続けるために 238

カバー装画／こうの史代　編集協力／渡瀬基樹



第1章 「マンガは研究じゃなくて、趣味でしょ」 ～熊本大学の路～

次世代による次世代のための

武器としての教養
星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、**みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていきたい。若い力で、世界を変えていきたいのです。**

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。**思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。**著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？　それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、**戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。**知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための〝武器〟としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていきたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長　柿内芳文

SEIKAISHA
SHINSHO